

2024年5月の総評に代えて

○林 桂 ○

●音無 早矢(埼玉県 25歳)●

人間のかたちを崩す花衣

【評】杉田久女の「花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ」を踏まえているだろうか。花衣は、人間が着ている間は、人間の形を模しているが、脱げば、花衣が持っていた人間の形も崩れる。

●加藤悠(愛知県 19歳)●

世の中は持たざるものに厳しくて
持つべきものもわからないまま

【評】卒業式や入学式の「前途洋々」や「未来がある」などの祝辞は、今現在は何ももっていない人への励ましの言葉である。とは言え、何を持つべきは教えてはくれない。晴れの儀式の場で励ましても、日常の躊躇の場で同じようには接してくれない。誰も簡単に持つべきものに会える訳ではない。

●ベロニカ(神奈川県 29歳)●

人生がどうにもならんときにだけ
涙を猫の背で拭いていい

【評】愛猫家にとって、猫の存在は無言の
励ましである。

●さいう(石川県 19歳)●

むーみんのように
陽なたのあぜみちを
ぽちてぽちてと駆けるおとうと

【評】「ぽちてぽちて」のオノマトペが秀逸。
歩いているのではなく、駆けている。そのス
ピード感のなさの愛らしさ。

●松下 誠一(東京都 21歳)●

自己暗示とけてポプラも怖くなる

【評】ポプラの樹勢は、けっこう攻撃的に見
える。炎の形にも見える。夜の影の姿を怖
いと思うこともある。どのような「自己暗
示」の世界にいたのかは分からぬが、とけ
た最初の現実がポプラとの遭遇なのだ。

●こはくいろ(大阪府 19歳)●

解読できないまぶしさがある

【評】何が解読できないのかが書かれていません。ただそのことが眩しい思いを招く。そこから読者は各自好きな対象を想像できる。

●村上 すう(長野県 19歳)●

改行後のことばがさびしくて
春

【評】ある詩人は、「詩とは改行です」と言った。改行によって複雑な情感は招き寄せられるのかもしれない。

●日下部 友奏(東京都 18歳)●

重力に慣れすぎているジギタリス

【評】重力に慣れすぎているのは、むしろ我々であることに気づく。健気に咲きのぼるジギタリスは、重力に抗しているように思えるからだ。

●azusa(京都府 22歳)●

病院の中にローソン花の雨

【評】私の地元の大学病院の中にも、ローソンが入っている。さまざまあるコンビニで、なぜローソンなのかは知らないが、一旦入ってしまえば、馴染みの風景になる。

●有野 水都(東京都 16歳)●

春の暮寝具売り場の大きなベッド

【評】寝具売り場の空間は、どこか閑散としている。展示品だから目立って当然だが、「寝る」という機能ではなく、「展示」という機能で並べられているベッドは、一層大きく見える。

●橋口 諒介(東京都 17歳)●

透明な強炭酸の水泡の中の光の中の光の

【評】炭酸の気泡がはじける様子を見事に活写している。言い止しの形も、気泡が続くさまになっている。

●雲理そら(大阪府 18歳)●

輸液にも
似かよっているひとたちの
ばいばいのたび、てにふれるくせ

【評】「ばいばいのたび、てにふれるくせ」がいい。癖といつていいくのかどうかは知らないが、そのたびに触れる人はいそうだ。それが「輸液にも／似かよっている」人たちだとう。

●常田瑛子(山口県 37歳)●

雨乞いは雨が降るまで止まなくて
無駄打ちされるホチキスの芯

【評】諦めなければ失敗はないというが、雨乞いも雨が降るまで続ければ、願いは叶うことになる。しかし、降るまでは失敗の連續過程でもある。二行目への飛躍。その距離感がいい。雨乞いの比喩となる。

●蝸牛(奈良県 35歳)●

ぐぬううう～～～
ショクオウダイコンニヤクの夏

【評】そのコンニャクの花は TV の映像でしかみたことはないが、世界一大きな花ラフレシアとともに、人間には強い異臭と感じられる臭いを放っているらしい。「ぐぬううう～～～」は、それに触れたときの感覚の表現であろうか。あるいはその花自体が発する存在感の模写であろうか。

●ひろみ(京都府 21歳)●

街ひとつ
洗濯槽に閉じ込めて
その音を聴いているような雨

【評】「街ひとつ」が「洗濯槽」に入ってしまい、しかもそれが音となって耳に届くのかと思うと、それも俄に比喩に形を変えて雨の音に転じる。豪雨らしい。

●古林暁(神奈川県 19歳)●

三人の国語便覧を重ねて
押し花をしたシモキタは初夏

【評】副教材の「国語便覧」は、持ち重りする割に、活用の場面は少ない。手持ちの中から、押し花の重り代わりにするにはぴった

りかもしれない。遊び仲間三人の三冊ならば、最適だろう。しばらく使用できないが、問題はない。

●小里京子（北海道 31歳）●

チョコレートがない父が帰らない

【評】どれだけ大きな出来事の断面なのか、小さな日常の断面なのか分からぬ。その特定できない様も、この作品のスケールを大きくしているように思える。

●檜野 美果子（宮城県 35歳）●

昼寝覚ああそうだった母だった

【評】幼児の子育て中である。わずかな時間を得て昼寝する。目覚めは「自分」に還る瞬間だが、「自分」より先に「母」として目覚める。心身ともに脱出口のない子育て期間を表現している。

●後藤 麻衣子（岐阜県 40歳）●

助手席に目高を分けてもらう瓶

【評】車を運転して、友人の育てた目高を分けてもらいに行く。助手席に目高の入れ物にする瓶を置いて。日常のさりげない断面を描いて、その前後を想像させる。

●福山ろか(埼玉県 19歳)●

葛餅の蜜 ことごとく弾かれて

【評】葛餅にかけられたきな粉と蜜の関係だろう。こんな体験を誰もしていそうだ。おいしそうの一つの形だ。

●鯖詰 缶太郎(宮崎県 39歳)●

おばけだよ
点滅しているよ
嘎れたついでだ
きもちよさそうに
蒸発しているよ

【評】「日曜美術館」の平泉成のナレーションの模写文体だろう。何にナレーションを付けたかは不明。その謎も面白い。

●牛田 悠貴(東京都 26歳)●

ひつじさえ
さかなのようなくちをしてねむる
ゆうぐれ しんくのにおい

【評】羊の口元を思い浮かべる。魚の口元を思い浮かべる。似てないけど、と思う。しかし、こう言うのだから似ているのかも。そう思わせる一瞬がある。「ゆうぐれ しんくのにおい」が取り澄まし寄り添ういい味を出している。